

兵庫県政 150 周年記念講演

「近代日本を創った男 一初代兵庫県知事 伊藤博文の挑戦 1853～1909 年一

平成 30 年 3 月 30 日 兵庫県公館

京都大学大学院 伊藤之雄 教授

素晴らしい雅楽の演奏の後に、伊藤博文の生涯、リーダーとしての資質を語るというのは、伊藤の気持ちに沿ったことだと思います。伊藤がやっていたことは、日本の伝統と世界の大きな変革の中で、日本をどう立ち直らせて発展させるかということであったので、常に伝統ということを彼は考えておりました。そのため、伊藤の変革が上手くいったんだと思います。まさに、今日の会というのは、それを象徴する舞台設定ではないかと私は思っております。

これから一時間弱、伊藤について語らせていただきたいと思います。レジュメが作られておりますので、私の作ったレジュメに即して、お話していきたいと思っております。

0 はじめに

まず、「はじめに」という 1 枚目ですが、ここでは、幕末から明治維新期、特に憲法制定の頃まで、日本というのは本当に暗中模索で、どうしてやっていくのか、先行きが不透明でした。例えば、財政で言えば、幕末維新期に不換紙幣をいっぱい刷って、そして戊辰戦争を戦い、その後、西南戦争でまたものすごいインフレになる。しかし、在外正貨と不換紙幣は、ある程度合わせないと全く信用がなくなるので、どうすればいいのかという課題を抱えていた。こうした対策を少しずつやりながら、財政を健全化していくという、そういう模索を行っておりました。

憲法なんてものも、作ったこともないし、どんなものかも分からない。そのうえ、上手く機能するのかわるかそこまで考えていかなければならない。トルコが日本よりもちょっと早く憲法を作っていますが、すぐ機能停止しております。だから、第二次大戦前で、西洋圏以外で、憲法を作りそして上手く運用し、憲法停止にならなかった国は日本だけです。そんなことがよくできたなという、そういう話をしていきます。

ここ 20 年来、社会の行き詰まりを感じることに、いろいろな専門家の方が、明治維新以来、日本は西洋の物まねをして追いつけ追い越せやってきたが、その限界に達したんだということをよく言われます。けれどもそれは、明治の歴史を知らない、誤解というか傲慢な発言じゃないかと私は思っております。

もし物まねをしたんだったら、日本に適合しない憲法を作ったり、議会制度を作ったりして、すぐ機能停止しています。物まねでは絶対に独立は維持できなかったんだということが今日の話のエッセンスです。まさに伝統と、当時の日本の状態と、そして新しいものをどのように取り入れてやってきたのかというお話をさせていただきます。

そして、このことを考えることは、今後、少子高齢化社会や外交問題など、これから待ち構えているさまざまな困難な問題に対して、どうやって対応していくのかということをお話することによって繋がるとは思いません。

私は、伊藤以外にも色々、昭和天皇とか、それから、原敬（はらたかし）とか、山県有朋（やまがたありとも）とか、西園寺公望（さいおんじきんもち）とか、様々な政治家を研究してきましたけれども、最も好きな政治家の一人が伊藤です。そして、この伊藤と兵庫県との関係がどうだったのかということにも触れながら、お話してまいりたいと思っております。

1 伊藤博文の生涯

まず、伊藤の生涯ですが、伊藤は天保12年、西暦で言えば1841年に生まれています。山口県の光市の出身で、父親は林十蔵（はやしじゅうざう）と言います。だから、伊藤家の先祖は「林」、今の自民党の文科大臣にもそういう方がおられますが、あの方は伊藤の遠戚にあたります。農民だったのですが、伊藤が13歳のとき、父と母が萩の足軽であった伊藤直右衛門（いとうなおえもん）家に養子に入り、それで伊藤も孫と言う形で入ります。それで伊藤姓になります。

そして、幕末に維新の実現に向けていろいろ活躍し、そして先ほど、井戸知事からお話があったように、慶応4年の5月23日に初代兵庫県知事になり、翌年の4月10日まで務めます。その後、1885年12月に、伊藤が中心となって最初の近代的な内閣制度を作り、首相となります。その時44歳です。以後、合計4回、7年半近く総理大臣を務めます。

そしてこの間に行われた重要なことは、やはり1889年2月の大日本帝国憲法の制定です。この時は総理大臣ではありませんが、むしろ首相を辞めて、枢密院議長として最後の仕上げに尽力しました。

それから、日清戦争の直前、条約改正に成功します。ここで、領事裁判権の撤廃とか、関税自主権が主要品目についてほしい得られます。それから、日清戦争に勝利しました。

そして、晩年になり、64歳で、わざわざ1905年の12月に、初代韓国統監としてソウルに赴任していきま。韓国統治は大変であって、最終的に伊藤は、安重根（アン・ジュンゲン）によって暗殺されました。享年68です。陪臣として初めての国葬が行われ、東京では非常に多くの参列者がありました。

2 伊藤博文の人から

こういう生涯を送った伊藤ですが、どういう人柄だったのか、最初に簡単に示しておきたいと思います。

吉田松陰が当時16歳の伊藤を評価しております。松下村塾に入って間もない頃です。「なかなか周旋家になりそうだ」と、要するに人との付き合いが上手だ、人から気に入られる、そんな人物なんだと言っています。それから「才劣り学おさなきも、質直にして、華なし。僕すこぶる之を愛す」と言っているんです。

学問はまだまだ十分ではないが、ということをとらえて、伊藤に反感を持つ人達は「学問は大したことはない」とよく言うんですけど、この言葉は16歳の伊藤に対する評価で、松下村塾は二十歳前後の秀才がいっぱいいるわけですね。例えば、現在いくら秀才でも高校1、2年の生徒が京大の秀才に敵うわけではないということで、決して伊藤への否定的評価じゃないんです。伊藤に対して松陰は、性格が非常に正直であり飾り気がないけれども、とても伊藤が好きなんだ、ということをやっている。これが16歳のときです。

それから16年経って、征韓論政変の後、参議として伊藤が入閣します。当時は、太政大臣、左大臣、右大臣、それから、数人いる参議が、現在の内閣にあたる政府の中核なのですが、32歳で初入閣しました。その時の木戸孝允の岩倉具視右大臣への推薦文の中に、剛凌強直（ごうりょうきょうちよく）という文言が入っています。強く厳しく正直な性格なので参議にふさわしいと。正直だというのは吉田松陰も言っていますが、それに強い厳しさが加わった。これがこの16年間の成長だと思います。

あと、伊藤の生涯をいろいろ見ていくと、楽天的っていうか、どうにもならないことはいろいろ考えても仕方が無いと達観できる性格も見られる。二十歳過ぎに井上馨（いのうえかおる）らと一緒にイギリスに密航するわけなんです。密航ですから幕府に見つかれば処刑されます。あるいは、金を払って船を手配してもらったイギリス商人に途中で海に投げられ、お金だけ取られるかもしれないとか、さまざまな不安があったと思います。もちろん、伊藤と井上が行方不明となれば、長州藩はその商人をただでは置かないという事は予想されますが、まあそれぐらいが安全の担保ですが、そういうことに、あまり心配しない。

それから、そういう伊藤の性格を示す一つが、この神戸とも縁がある楠木正成です。楠木正成が大好き

で、次の2枚目に参りますが、1892年（明治25年）、憲法発布から3年ぐらいたってちょっと落ち着いてきた頃に、神戸の諏訪山に小さな別荘を持ちます。そこから神戸港が見えるという場所なんですけれども、こちらに来たときにゆっくり過ごしたいと思ったからだと思います。

伊藤の行動も、楠木正成の行動に似ています。例えば、元治元年、幕末の長州藩で、高杉晋作らの求めに応じた功山寺挙兵（こうざんじきょへい）という事件が起きます。これは、いったん長州征伐で幕府軍に降伏した後、藩全体が幕府に屈した勢力が主導権を握っている中で、高杉たちがこれではいけないと立ち上がった事件です。最初は80人しか参加者がいないのですが、伊藤は、最初から参加していました。これは大変度胸が要ることです。高杉が好きだったんだということもありますけれども。一方で、奇兵隊の軍監をしていた山県有朋は、ちょっと臆病で慎重なので、2週間後にしか加わりません、勢いが出てきてから加わります。伊藤は、やるべきことはすぐに行動に移すというところがありました。

他にもいろいろと例はあるのですが、そういう性格もあり、明治憲法（大日本帝国憲法）を制定して以後、明治天皇の強い信頼と、高い評価が継続します。伊藤の政治権力の一つの強みというのは、明治天皇の絶対の信頼があることと言っていいと思います。これはやはり、目先の損得とか不安に影響されずに、やるべきことはやるという性格と、非常に立派な憲法を作ったという実績によるものだと思います。

3 西欧への関心と英語力の向上

その伊藤が、どうやって西欧というものを学んでいったかというのを簡単に見て、それから兵庫県知事時代が伊藤にどのような影響を及ぼしたかというのをちょっと見ていきたいと思います。

まず、伊藤は、17~8歳頃から英学への関心を持ちます。そして、20代の初めにイギリスに密航します。伊藤と井上馨と、あと三人ですね。後に鉄道の専門家として鉄道のトップになる井上勝（いのうえまさる）ら他にもいますが、長州藩が4国連合艦隊に襲われることを聞いて、伊藤と井上馨の2人が、攘夷を止めなければならないと考えて帰国します。長州藩はその時期、攘夷一辺倒ですから、戻って攘夷を止めようとするれば、切り殺されるかもしれない。だから、5人も一緒に帰るのではなく3人は残ったということですが、この2人はすごい度胸があると思います。伊藤と井上は、日常会話に不自由しない程度の英語を身につけただけで戻ってきます。

イギリスに渡ったことによって、圧倒的なイギリスの国力を知ります。そして、攘夷は無理だと主張し、その時は完全には長州藩を説得できませんでした。しかし、長州藩は4国連合艦隊に負けた後、やはり伊藤・井上らの見方が正しい方針を変え、攘夷を捨てて、尊王倒幕と、新しい近代国家を創る方向をリードしていきます。

その後、伊藤は、英語力と国際知識を急速に向上させていきます。イギリスにいた頃も少し学んだのですが、日本に戻ってからむしろ勉強した。それは、馬関（ばかん）戦争、さっき言った4国連合艦隊（4国というのはイギリスやフランス、アメリカ、オランダという列強です）が、馬関（下関）を攻撃した。その後始末の交渉などに、伊藤が通訳として関わり、そして、そこで知り合ったイギリス人や、その後、長州藩が幕府に対抗するために長崎で武器の買い付けなどをする相手の西欧商人などとも、物怖じせずに話したと言います。

特に有名なのは、先ほど井戸知事も出しておられた、パークス公使です。このパークス公使というのは、幕末から維新にかけて、列強の日本に対する外交の一番の中心人物です。すごく個性の強い人物で、ガンガンと強く言う。しかし、理詰めでちゃんと話すと理解してくれるという、そういうタイプの人物なんです。伊藤はそのあたりの性格も見抜いたんだろうと思います。

それから、伊藤と同年代のアーネスト・サトウというイギリス公使館員がいます。パークス公使と伊藤は

親しくなったといってもそこまでは親しくなれませんが、アーネスト・サトウとは本当に、友人関係になっていきます。

こうして、イギリスから列強や幕府の動向を知る。それから列強の国の仕組みなどについて、耳学問をしていきます、むしろ。あまり英語ができるわけではないので、耳学問。もちろん英語も読みますが、西欧諸国の大枠を理解する程度でした。

しかし、やはり英語の読解力が不足だということがあって、長崎へ戊辰戦争のための武器の買い付けに行った時に、武器の買い付けが終わると、伊藤は、戻って長州藩兵と共に戦いたいと言った。しかし、藩としては、伊藤のように語学ができ、西洋人と渡り合える人を戦争で死なせるわけにはいかないということで、長崎に留まっておれという命令を出した。その間に、伊藤は日本人の医学生から英語の講読を学びました。このように常に努力している。

4 初代兵庫県知事

イギリス密航以来の西洋人との交渉能力を持っていますので、伊藤は幕末期にも木戸に可愛がられているのですが、維新後は、非常にはっきりと長州藩のリーダーとなった木戸の抜擢を受けます。

慶応4年の1月から3月にかけて、伊藤は、外国事務掛、それから参与兼外国事務局判事となります。このポストは、現在で言えば外務省の局長クラスに当たるポストで、十分、列強の外交官と交渉ができ、問題に対応していきます。

先ほども井戸知事が出された岡山藩兵の発砲事件ですが、これは、岡山藩兵が西宮の警備に向けて神戸の居留地を通った時に、その行列の前をフランス人が制止にも拘わらず強引に横切るということがあり、岡山藩兵の一人が、それを槍で突いて、それを見ていた列強の他の国の人も巻き込んで、鉄砲の撃ち合いになった事件です。

伊藤は、列強のリーダーであるパークス公使と話し合っ、1月11日に起きた事件を、2月9日までに決着を付けるという活躍をします。結果は、伊藤といえども、向こうが悪いというようには認めさせられず、日本が悪うございましたということになり、責任者の岡山藩士が切腹するというので、決着を付けます。

この時、なぜ融和的だったのかというと、この時期は戊辰戦争で旧幕府軍と新政府軍が鳥羽伏見の戦いの後も戦いを続けてまして、列強がどちらを正式な政府と認めるのかどうかというのが一番大きな問題でした。列強は中立を保っておりましたが、これは非常に困ったことで、新政府を認めてもらわなければならない。そこに弱みがあったわけです。

また、新政府を認めてもらうためには、フランス公使、オランダ公使や英国公使を、明治天皇に謁見させるという、要するに、現代でいう親任状を渡すという儀式をやらなければなりません。それが旧暦の2月30日に予定されていたのですが、パークス公使が攘夷派の武士に襲われて、後藤象二郎（ごとうしょうじろう）や中井弘（なかいひろむ）という警護の武士が、襲った者と戦い切って捨てたんですけども、パークスは京都御所に行けなくなった。そのために謁見を中止したら、いつ列強との関係が結ばれるか分からない。

ここで伊藤は機転を働かせて、パークスが襲われて今日は行けないという知らせを受け取るのですが、それをフランス公使、オランダ公使には何も伝えずに、謁見を行ってしまった。すると、あと残ったのはイギリスだけですからイギリスもしてくださいということで、3人の公使の謁見をすべて終えます。このように、伊藤は非常に柔軟に機転を働かせます。

こういうさまざまな能力が買われて、兵庫県が出来たときに初代の兵庫県知事になります。26歳のときです。資料の後ろのページにある地図の「第1次兵庫県」と書いてあるところが、伊藤が兵庫県知事になった時期の兵庫県です。慶応4年から明治4年の11月までですが、ここにあるように、神戸を中心に、現在兵庫

県内にちらばっている小さなところですが。しかしこの地域は、神戸とか先ほどの西宮とか、この辺りで列強と揉め事が起こった時にどう対応するかという課題を持っていたところですが。そういう意味で、新政府はエースを送り込んできたわけです。

そして、伊藤は、知事になれたことを非常に喜びます。知事というのは、藩でいうと藩主と一緒にです。だから、足軽から藩主になった、みたいな感じですね、大喜びします。

実際には、一般行政よりも外交交渉、ややこしい話を担当していたということです。伊藤は知事になって何をしたかはまだ十分研究されていないですけども、大きな事件は研究されています。

例えば、9月に、米国人水夫が酔っ払って、(県庁の)警備の徳島藩士を小刀で刺して、最終的に刺された徳島藩士が死ぬという事件が起きます。当時の県庁に乱入してくるという、こういう事件にどう対応するかが問われます。

伊藤は死刑を主張するんですけども、結局、禁固1年ということになり、そのまま米国に送還するということになる。これで、改めて不平等条約というものを身に沁みて感じるということとなる。だから、いくら外交交渉にそれなりに慣れてきたといっても、たいした結論は出せないけれども、とにかく、きちんと言うべきことは言い、その後に処理していくということをしておりました。

このときの伊藤が抱えていた課題というのは、列強の横暴に対して、日本の国力をつけてなんとかしなければならぬということと、もう一方は、(神戸事件の)岡山藩兵のように、いくら行列を横切ったからといってもいきなり刺してしまうという攘夷思想、列強に対する反感をなんとかしなければならぬということ、この二つの課題です。

5 「憲法政治」の定着

日本が近代化するには、藩をなくすべきだと伊藤は当時の志士の中では最も早くから考えていた一人です。これは、鳥羽伏見の一年も前から、伊藤はそう言っております。木戸に提言している。これを兵庫県知事の時代にも発言します。それが他の保守派に嫌われて、副知事に降格されてしまいます。明治2年の4月のことです。

しかし、中央政府としては、財政改革も必要だということで、5月に会計官の権判事として東京に呼び戻します。現在の財務省の局長クラスに相当します。その後、伊藤はむしろ、大蔵官僚として、日本の近代化を進めていく。当時の大蔵省というのは、税を取ることもありますので、廃藩置県後は、現在の知事、当時は県令と言いますけれども、その人事権を持っている非常に大きな官庁であり、伊藤はそこで次官クラスに昇進していきます。

初代の兵庫県知事になったということはどういうことなのかと、伊藤の生涯を振り返ってみますと、やはり、26歳の伊藤が、行政から外交交渉まで全てひとりで考えてやらなきゃならないということです。

中央政府にはもちろん、大久保利通、木戸孝允、岩倉具視とか三条実美、そういう有力者がいますけれども、外国語ができないし、外国人とそんなに接したことがない。だから、結局のところ、伊藤が実質的に解決していかなければならない。そういう機会を与えられたということで、苦労しながら自分で判断しながらやっていくという経験が、その後のさらに大きく困難な課題を達成することに大きく役立ったんじゃないかと思えます。

それから伊藤は、廃藩置県を唱えて副知事に降格ということになりますが、(政府の実力者である)木戸の腹心として可愛がられている。近代化を進める中で、だいたい明治2年3月ぐらいに木戸グループという

のができます。伊藤はその有力な一員です。

木戸をトップにして、佐賀藩出身の大隈重信、それから伊藤博文、井上馨と続く。大隈がだいたい次官クラス、それから伊藤、井上が局長クラスになります。陸奥宗光も、この頃から伊藤と頻りに連絡を取り合っています。それから、レジュメには挙げていませんが、旧幕臣の渋沢栄一も木戸グループです。

その陸奥ですが、そこに挙げておきましたように、第4代兵庫県知事になります。しかし、一旦帰藩して、和歌山藩の藩政改革を行った後、廃藩置県の後には大蔵省に入って局長級になりますが、財政問題で大隈と対立するなどして、一旦辞めます。しかし、その後また藩閥政府に入り、第2次伊藤内閣では、外務大臣として、条約改正や日清戦争の指導で非常に活躍します。

陸奥が「外交とは何か」というのを語っているのですけれども、外交とは、ひとつは、相手国との関係だと、日清戦争だったら清国との関係、これはまあ当たり前ですけれども。もうひとつは、列強との関係だと言っている。いくら日本と清で話し合っても、列強が介入してくる。さらにもうひとつ、陸奥は、外交とは国民との関係だと言っている。いくら（政府間で）話をつけても、国民が納得してくれなければならない。この辺りが陸奥の非常にするどいところで、これは現在の外交でも言えるのではないかと思います。そういうことを陸奥は明快に言っております。

さて、あまり、喋っていて時間がなくなりましたので、あと、伊藤のやった一番大きなこと、明治22(1889)年の憲法制定について話したいと思います。

伊藤は、岩倉使節団で明治4年～6年に欧米に行って、帰ってきた後、岩倉や木戸、大久保も含めて、イギリスの国制というのを研究しようとしています。長期的にはイギリスを目指すということです。その後、伊藤は大久保に接近します。木戸はちょっと体調が悪いこともあって、非常に感情的になるんです。だから、むしろ、薩摩の大久保に期待するようになります。その後、1876年には、木戸以上の権力を持って、伊藤は長州閥を束ねる存在になります。木戸は、翌年、西南戦争中に胃がんで死去します。

ここは本当に日本全体を考えて、木戸への恩というよりも、日本にとってリーダーは誰がふさわしいのかという決断の上で大久保に近づいたので、伊藤はその後も京都の霊山（りょうぜん）墓地にある木戸の墓に行きます。自分の目先の出世のために権力に近づくということではなくて、木戸への想いはずっと持って、常に京都の墓に参るといふこともしながら、日本全体のことを考えて大道を行きます。

伊藤のさらに大きな転機になったのは、「明治14(1881)年の政変」と言われるものです。大隈重信が、福沢諭吉や在野の民権派と結びついて、2年後に国会を開く、政党内閣制度にする、その前に憲法を作るということを主張します。これに対して、伊藤は、憲法はそんなに簡単にできないと思っています。何よりも国民意識の成熟が必要で、また、憲法などの法を理解し運用する官僚を作らないといけない。そのため帝国大学に法学部を作らないといけない。地方制度の改革も必要だということを考えています。

それに加え、当時は、明治天皇にどのような役割を与えていくかというのが未定でした。大隈系は、イギリス風の議会中心にやるべきだというのが、議会自体がまだできていなくて、議会とはなんたるものかも多くの人が分かっていない。

保守派は、皇帝権力が中心のドイツに見習えばいいと言う。しかし、実際、明治天皇は15歳の時に維新を迎え、その後も実質的な権限はほとんどありません。そういう意味では象徴的な存在です。（明治天皇の前の）孝明天皇はすこし影響力をふるいましたが、近世もそうでした。明治14年政変の時でも、明治天皇の名で大隈追放ということを行いますが、天皇の意思はあまり問われませんでした。

結局、大隈が伊藤に無断で建白書を出したということで、最終的に、大隈を追放します。しかし、その後、伊藤ら政府は、憲法を作って9年後に議を開くという約束をせざるを得なくなる。そうしないと国が治まらないと。

伊藤は、明治憲法の制定の中心になって、近代国家の骨格を作ることになるのですが、憲法を作るんだ、憲法を作って国会を開くんだといっても、どこに行き誰に学ばばいいのかというのは全く分からない。他の国はあまりにも進んでいるので、とりあえずドイツに行こうということになります。ロシアも考えられるんですけど、ロシアは議会がないので、議を開くには、ロシアに行っても仕方ないということです。明治15年から16年にかけて、ドイツとオーストリアを中心に調査して、シュタインというウィーン大学の教授に出会って、それで憲法の大枠をつかむことが出来たと感動します。その後、イギリスにも2ヶ月滞在して、調べています。つまり、長期的にはイギリス風を考えながら、とりあえずはドイツ風でということを目指していたわけです。

伊藤は、主権は国家にあり、君主権を制限するという当時19世紀の最先端の「君主機関説」という学説を取り入れていきます。これはのちに、憲法学者、美濃部達吉が「天皇機関説」として、言葉を変えながら展開するものです。

伊藤は、君主権と立法権と行政権の緊張関係が必要だ、君主権が肥大化してはだめだと考えていました。歴史は変化するし、究極的には議会が伸びていくだろう、そして、憲法は日本固有の歴史を反映すべきで、そういう立憲国家を作るんだと考えていました。

結局、枢密院などでの説明では、まだまだ保守派がいますので、主権は天皇にあり、天皇は大権を議会や行政府に委任するんだと、公的には発言をします。伊藤は、明治天皇の役割として、日常は政治関与を抑制して、政治が混乱した際のみ調停的に介入するという役割を設定します。

これは憲法の条文上どうなっているかという、例えば、法律予算は帝国議会の協賛が必要であるという規定を置き、天皇が勝手に決められないし、政府も決められないということにする。帝国議会は、毎年開かなければならず、国務大臣は、天皇を輔弼するということにして、天皇が専制君主的にふるまえないようにする。要するに、天皇が出す勅令でも、全て国務大臣のサインがいるということです。国務大臣は、天皇が何かおかしいことを言ったときには諫めるし、場合によってはサインをしない、という可能性も残しておく。

一方で伊藤は、明治天皇に対しては、政治にあまり関与することを望まないということをしきりと教えていきます。こうして、明治天皇との信頼が形成されます。憲法の骨格を理解してもらうために、伊藤は藤波言忠（ふじなみことただ）という天皇と同年代の侍従（馬が専門の侍従で、天皇は乗馬が好きで藤波との関係が良かった）にシュタインの学説を学ばせて、この人を通して教えてもらうということをしします。これを通して、明治天皇は、憲法発布の時までに、君主機関説の大枠を完全に理解し、伊藤への強い信頼と評価を築いていきます。

しかし、憲法の運用の問題において、やはり、藩閥勢力の中の保守派、例えば山県有朋らは、議会がない方が良く、飾りというか、まだまだ議会の発言力を認めたくない、と主張するんです。議会も議会の方で、あまり現実的でもないような要求をする傾向がありました。

こうして度々政争が起きて、混乱が起き、日清戦争までに4回ほど憲法停止（議会停止）の危機が起きる。日清戦争後も1898年に1回危機が起きる。これに対して、天皇の詔勅だとか、伊藤の妥協姿勢だとかで、危機を回避していきます。つまり、憲法を守ろうとする伊藤の信念と明治天皇の調停能力で乗り切ります。明

治天皇も憲法を守ろうとしています。だから、もし伊藤が、憲法発布した後、暗殺されたり、病気で死んだりしていたら、1890年代の早い時期に憲法が停止になった可能性もあると思います。

伊藤はその後、憲法を発布して議会が出来て、10年ぐらいすると、「立憲政友会」という政党を自ら作ります。つまり、それまでの、とりあえずのドイツモデルを超えて、イギリスモデルへ変えていくことを目指したわけです。この10年間で、野党的な、批判ばかりしている政党しか育たなかったのも、政権担当能力のある政党を自ら作らざるを得ないと考えて乗り出します。

それから18年後に、伊藤の後継者である3代目立憲政友会総裁の原敬（はらたかし）が、政党内閣を作る。この内閣は、戦前の憲法においてもここまでできるんだという限度を示しています。内務省、外務省、農商務省、文部省等の一般官庁以外に、陸・海軍両省、それから宮中もコントロール下に置きます。原の個人的能力の高さというのももちろんあるわけですが、そういうところまで、明治憲法で出来るんだということ示したわけで、まさに伊藤の後継者と言えると思います。

つまり、日本が最初に憲法制度を学んだドイツですら1880年代に一度憲法を停止するという、そういう状況になった。日本が憲法停止せずに行けたということで、特に、日露戦争に日本が勝った後、イギリスなど西欧諸国で、伊藤や日本への評価が非常に高まっています。

これが、伊藤が、成し遂げた大きなことです。それも、暗中模索の中で大きな国家のスケッチを描き、それを憲法制定という形で具体化し、うまく運用できたというのは、初代兵庫県知事として赴任して、いろいろな困難な問題に立ち向かったその経験が大きく作用したのではないかと思います。

リーダー養成で難しいのは、おそらく今の知事さんも非常に有能なリーダーだと思うんですけども、リーダーが自分が全てできてしまう、見えてしまうということではないかと思います。そうすると、リーダーが「大丈夫か？」とチェックを入れ、下の者は、「最後はチェックがあるんだから」という本当に自分で考えて創意工夫しようとしないう、それが難しいんです。

このことは、どうして伊藤や原のような人間が正しく国をリードすることができたのに、その後継者たちが太平洋戦争で失敗してしまったのかということに繋がります。伊藤たち明治・大正のリーダーは、主要国とは戦わない（日露戦争でロシアと戦いましたが、ちゃんとイギリスやアメリカ等、主な国の支援は得ている）、世界の主要国と戦って、小さな日本が何ができるかということをおぼえていた。しかし、学校教育を受けた、士官学校や海軍兵学校を出た人たちは、それが分からなくなってしまう。だから、リーダー養成は、大きな課題です。難しいわけです。

6 国際化への挑戦から国際平和思想へ ……帝国主義の時代克服への夢

もう一つは、国際平和の秩序をどのように作るのかということです。国内の憲法の問題でもそうですが、最初は、とりあえず列強とどう対応しながら国力をつけるかっていうことでやっているんですけども、伊藤は、だんだんと、政治とは何か、国際平和とは何かという哲学を発展させていきます。それまでの政治技術的発想を超えたんです。これが特に外交面で現れている。それが、国際化への挑戦から国際平和思想へという、帝国主義の時代の克服への夢ということになります。

伊藤は、最初は、幼稚な外交観しか持っていません。例えば、幕府の第二次長州征伐の前には、イギリスの軍艦に下関を守ってもらおうと木戸に提案しました。ちょっと甘いんです。アーネスト・サトウと友人関係があり、パークス公使ともそれなりに親しいからイギリスを信用するわけです。さすがに木戸は、外国交

渉のバランス感覚があって、そんな危ないことをしたら、逆にイギリスにどこかを取られてしまうんだろうと考えました。やはり年の功と政治経験です。

こういう幼稚な外交観を持っていたんですが、だんだんと、欧州での憲法調査の頃ぐらい、明治16(1883)年ぐらいから、冷静に列強が見えてきました。西欧列強はキリスト教国であるけど一枚岩ではないということを知る。だから条約改正でも、個別に上手に交渉すれば大丈夫ではないかと考えはじめる。

維新直後とか幕末には、列強の公使団はまとまって日本に要求してくるわけです。さきほどのフランス人の殺傷事件もそうですが、フランス人の問題なのにイギリス人のパークス公使が出てくる。こういうことがあったので、なかなか西欧列強内部でも対日政策でかなりの対立があるということまで理解できなかったわけです。(西欧列強も一枚岩ではないことを理解して)条約改正交渉も進むわけです。

次は、日清・日露の両戦争の外交主導です。このときの伊藤や陸奥や、日本のリーダーの多くが、朝鮮国にロシアが入ると日本の安全保障上の脅威だから、日清戦争の場合は、日本の援助の元で、朝鮮国が自衛できる国になることを期待します。また、なるだけ戦争は避けたいという考えをもっています。しかし、帝国主義の時代ですから、妥協できなければ戦わざるを得ないと考えています。

もうひとつは、合理的な世界観と言うか、日本が軍事力を背景に一時的に領土を拡張しても、列強が認めないならば、それは保持できないということを理解しています。さらに伊藤は、日露戦争の後、日露両国の将兵の犠牲者が膨大に出たことを反省し、武装することが平和につながるという考えに疑問を持つ。国際平和会議等も行われているんですけども、結局は武装の下での平和である。真の平和ができないのかと考えるが、日本はまだ世界のことを治める力はありませんので、とりあえず極東で、清国、韓国の秩序ある発展を目指すわけです。経済的にもそうですし、まず清国に憲法を布いて立憲制を発展させる。それに貢献できないかということ、伊藤は考えるわけです。

韓国に統監として赴任したのもその一環です。(私は)新聞記者からのインタビューなどで、「(伊藤がなった)韓国統監というのは偉いんですか?」とよく聞かれます。しかし、伊藤は、大勲位菊花大綬章頸飾(だいくんいきっかだいじゅしょうけいしよく)という最高の勲章をもらっているのだから、韓国統監になろうとなるまいと、宮中席次は一番上です。皇族の下ではあるが、儀式で並ぶときには、それ以外の人では首相も含めて一番上で、韓国統監などになる必要は何もないわけなんです。

しかし、伊藤は、東アジアの秩序を作りたいということで行くわけです。そして、韓国の近代化というのは、日本の利益になるんだということを言います。日本の安全保障の面でも利益になるんですが、やがては韓国の利益にもなるんだということを言います。

こうして統治を進めるんですけども、やっぱり異文化間の相互理解の難しさと言うか、韓国人の反発があり、最終的には義兵運動というゲリラ運動まで出てくる。そして伊藤は、韓国を独立したままでの近代化というのは無理だと最終的には諦めて、併合に同意する。桂太郎首相と小村寿太郎外務大臣が、伊藤に韓国併合の意見を求めた際、伊藤は反対するんじゃないかと思っていたが、伊藤はあっさり同意した。そして、伊藤は併合はしないと断っていたので、統監を辞任せざるを得なくなりました。その後、日本への司法権委任と言うか、韓国に裁判所を作るとのことなどをやり、併合するにしても、近代的な植民地を作るんだという姿勢を示します。

伊藤の構想していた併合というのは、実際に行われた併合とは違います。つまり、韓国人の内閣を作る、朝鮮の植民地に議会も作る。こうして、朝鮮に憲法政治を作っていくんだことを目指した。しかし、実際の併合は、1910年8月、のちの総統府に山県系の官僚が入って、山県系の軍人と官僚による支配が行われます。

1909年10月に伊藤が暗殺されてから、この方向に進みます。伊藤が活着しているうちは、いつ併合する

とも全く分からない。併合する方針は1909年に出されるんですけども、実際にいつ併合するかというのは出されないし、どんな形の併合かも出されなかった。

これは、伊藤と山県が対立していて出せなかったのです。早い時期に併合してしまうと、山県的な官僚支配の併合になるので、伊藤としては、じっくりした時間をかけながら韓国人の議会を作り、そして韓国人の内閣を作った形の併合にしようと考えていたからではないかと思えます。これはイギリスがエジプトに行ったエジプト人の自治権のある支配と非常に似ていて、第二次大戦後にスエズ動乱等の問題があったけど、イギリスに対する反感というのが今のエジプトではあまり強くありません。伊藤的な併合が行われていれば、(今の日韓関係とは)違った結果が生じた可能性もあります。

伊藤は、清国の立憲君主制移行にも協力しますが、途中で清朝が辛亥革命で滅んでしまった。国際関係では夢というか理想が過ぎたと言えるかもしれません。先ほども言いました伊藤の生涯というのは、最初は実務的にやって、それからだんだん、国内での調和、そして東アジアでの調和というリーダーとして哲学的なものがかかり入っていくということになります。なかなかすごい人だなと私は思います。

7 真のリーダーとは …おわりに

真のリーダーとは何か、というので簡単にまとめておきますと、やはり、公共性のあるビジョンを持てる人であることです。そのためには、外国語の能力がある程度必要です。幕末維新では特に必要でしたが、明治天皇などは外国語はできないんですけど、伊藤やそういう人から聞くことによってビジョンを身につけて、理解して、バランスの良い天皇になりました。本当に名君だと思います。だから、ヒトラーがいくら統治したとしても、これは良いリーダーとは言えないわけです。単なる専制的な権力者です。

それからやはり、色んな人の意見を聞いても、最後には、ひとりで問題を解決する、あるいは、決断する能力ですね。それから、木戸がだめだったら大久保について大久保中心にやっていくという、恩人との関係でも公共的な考えのもとで変えていくという態度、自ら変わる能力、これがやっぱり必要なんじゃないでしょうか。そこには不安もあるし、精神的な強さも必要です。

ただ、伊藤でも、先ほどの明治14年政変の後に9年後に国会を開くと言ったとき、毎晩一升も二升も酒を飲むようになったと、親友の井上馨が心配しているんです。これはやはり、(国会を開くことが)本当に来るのかという不安、難しさが本当によく分かっているから、憲法を作るのがいかに難しいかと分かっているから、そういうふうにな不安になるんですけども。まあそういう意味では、気力も体力もいるんですね。

あとは、人間関係とか心配りができること。そして、気晴らしができるということも必要です。伊藤は、楠木正成が好きでこちらに別荘を持ったり、それ以外にも、あちこちに別荘を持っています。

少し急ぎましたが、一通り、伊藤の人柄や業績は分かっていたんじゃないかと思えます。神戸というか兵庫県には、伊藤の作った遺伝子というか、新しい伝統を尊重しながら革新をし続けていく姿勢が残っているような気がします。今後も兵庫県は、やっぱり日本のリーダーとなる県として、頑張っていたいただきたいと思えます。ご静聴、ありがとうございました。(会場：拍手)